

存義歌仙「弘法の」の巻評釈

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 真弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4734

存義歌仙「弘法の」の巻評釈

石川真弘

はじめに

撰津国毛馬村に生れた蕪村は、若き日江戸に下って夜半亭巴人の下で俳諧に励み、巴人亡き後江戸座、殊に存義派グループの連中と俳交を重ねていたと言ふ（清登典子著『蕪村俳諧の研究』）。存義らの俳諧は、一般に浮世風、あるいは洒落・卑俗性が強いと評されている。しかし必ずしも作品の解読は充分に行なわれておらず、また存義らの俳諧が後の蕪村の俳諧にいかに影響を及ぼしたかについても具体的に考察されてはいない。そこで蕪村が江戸滞在の頃学んだといわれる江戸座の俳諧の中、存義の代表的作品である独吟歌仙「弘法の」の巻（『江戸廿歌仙』所収）を取り上げ、些か評釈を試みてみようと思う。

弘法のこゝにも一字山ざくら 存義

発句 春（山ざくら） 弘法は、真言宗の開祖空海のこと、平安初期の三筆の一人に数えられ、書に関する伝承が多い。両手・両足・口に一本ずつの筆を持つて文字を書いたとも言われ、五筆和尚の名がある。発句は、山裾を帯のように取り巻いて咲いている桜を、弘法大師が書いた一の字に見立てた句作りである。芭蕉に「大比叡やしの字を引いて一霞」（六百番俳諧発句合）という句がある。また『醒睡笑』巻之七の三「餓鬼めの大師」という話の中に、「弘法に一の字はないの」という一文が見える。老僧が、弟子の僧たちに、豆腐一丁を田楽にして食べるに当たり、一の字の付いた祖師の言葉を書いてから食べるようにと命じる話である。当時「弘法の一字」ということばは、広く知られていたようである。発句は、芭蕉の句や「弘法の一字」という言葉を基に趣向した作と思われる。世間は春爛漫、さてこの山裾に連なる桜の木々は今を盛りと咲き誇り、五筆和尚と称される空海が書き記した一の文字にも似る桜の帯びとなつて見事な眺めである。

柱杖にむすぶ瀧のいとゆふ

脇 春(いとゆふ) 柱杖は「シュジョウ」と訓み、僧侶が行脚修行の折りに用いる杖と見る。前句の「弘法」より行脚僧を発想して杖と応じ、諸国を巡る修行僧を趣向する。「瀧のいとゆふ」は、滝壺から立ち上る水しづきが霞となっていとゆふのように見える様を言う。「むすぶ」は、瀧に生じる霞が杖にかかり纏わり付くように見える様子を表わす。「むすぶ」と「いとゆふ」は縁語である。僧は回國修行を続け、今日はいよいよ山裾に杖を引き、山入りしようというのである。滝は、神靈竈れる祈り修行の場、身を清める所でもある。折から春の季節を迎えて、山の麓辺りは弘法の一筆とも言うべき一の字なりに桜の木々の花が咲き連なり、その山懐に落ちる滝から霞が立ち込め、その霞がまるでいとゆうのように僧の杖に絡み付く。帯び状に咲き連なる山桜、山間に落ちる瀧、杖つく修行僧の姿、一幅の墨絵を思わせる景である。

長歌にながくも春を味て

初オ三春(春) 前句の杖を突く人物を、四季の移ろいを楽しむ老人と見定めた付けである。「瀧のいとゆふ」は、山路の一景である。風雅好みの老人が、厳しい寒さも漸く去って、暖かさがほのかに感じられるようになって来た春の景を楽しもうと、杖を引いて山路を辿り、山間から落ちる瀧が眺められる所に行む。春うららの氣

分に誘われ、悠長に構えてつい長歌の一節を長々と謡い出したと言うのである。長歌は、三味線歌の一つである。そのゆったりとしたリズムが春の気分に通い、「長歌に」の「に」は「春を味て」に掛かる。「ながくも」は、「長歌」に導かれた表現で、時を忘れてゆっくりと長歌を謡って春の気分に入るの意である。長歌を嗜む人は、俗事には関心を寄せず、のんびりと優雅に日々を過ごす富裕な老人であろう。「長歌にながくも」という洒落表現は、『江戸廿歌仙』の一特徴である。

前歯二枚は象牙なりけり

初オ四 雑 前句の人物を、若い頃には仕事も遊びもよくしたであろう大店のご隠居、すなわち今は身過ぎ世過ぎをすっかり息子に任せ、悠々自適の暮しをするご老人と見ての付けである。場所は、道路に面した隠居所の辺りであろう。前句の「長歌がなく」に春秋に富める体、即ち長寿・長者の意を読み取り、その富裕な老人の生活振りを入れ歯の象牙で受けた付けである。象牙の入れ歯は、大変高価なものである。老人は、金持ちゆえ贅を尽くした象牙の入れ歯で歯並びを美しく整えている。長歌を謡う開いた口によって、象牙の入歯が見え、それと気付いたと趣向する。春の気分誘われて長歌を謡い出したご隠居のその開いた口で、ふと気付く。さすがに富裕な老人だけあって、前歯二枚は象牙の入れ歯であった、という句作りである。表現は、極めて単純明晰であるが、作者の視点、人物描

写に江戸座風俳諧の特質が窺われる。

児医者にふり袖着せて月の興

初オ五 秋(月) 月の定座である。「児医者」とは、小児科医のこと。「月の興」とは月見の宴における遊び、座興の意である。前句の年老いた人物を、目立つような前歯に贅沢な象牙の入歯をしていのお洒落な伊達好み児医者と見る。振り袖は、嫁入り前の十六・七の娘が着るものである。そうした振り袖を粹狂な児医者に着せることのたわむれをもって、月見の宴の遊びの一興と趣向する。必ずしも年老いた児医者と見る必要はなからう。すなわち大家の月見の宴に招かれた児医者が、会の盛り立て役を務める体である。当時医者が、宴席の太鼓持ちの役割を果たすことがしばしばあったと言ふ。月見の宴で振り袖を着せられた児医者は、象牙の入れ歯をして口元を奇麗に見せるおしゃれな通人であった。付句は、児医者の通人ぶりのおかしさを詠む。

ほそ江続きの庭の初汐

初オ六 秋(初汐) 初汐は、陰暦八月十五日、満月の夜の満潮を言う。「ほそ江続き」「初汐」は、川の流れが、すぐに海に続く土地柄を思わせる。例えば本所深川辺りであろう。大川沿えの下屋敷、あるいは別邸と言ったところである。付句は、ほそ江を設けて庭に

海水を引き入れ、趣向を凝らした造り成した庭構えの邸宅であろう。今日は中秋の名月八月十五日、庭の池には初汐が満ち、折りから水面に映る月を楽しもうと月見の宴を催した。前句は、その宴の興である。その家の主人は、趣向好きで、児医者を呼んで振り袖を着せ、宴を盛り立てたのである。一句としては景気の句であり、『江戸廿歌仙』には珍しい。場面の転換を図った句である。

穢を崩せば出るたばこ入

初ウ一 秋(穢) 「穢」は「カリイネ」と訓み、刈り取って穂積みにした稲のことである。場面を農村に転じる。前句を海の端など、汐入りする川辺近くの浜新田に面した百姓屋の庭先辺りと見ての付けであろう。その庭先に刈ったばかりの稲が、穂積みにされている。百姓は、稲刈りに励み、穂積みの仕事に精を出して疲れ、少し休もうと思ひ、腰に差しておいたタバコ入れに手を遣ったが、タバコ入れがない。さては穂積みの中に取り落したかと穂積みを崩してみると、案の定タバコ入れが出てきたの意である。タバコ入れを落として戸惑う農夫の表情、折角積み上げた穂積みを崩す農夫の気落したような仕草が想像されてなんとも可笑しく、巧みな付けである。

誰やらに似た事触の面

初ウ二 雑「面」は、「ツラ」と訓む。事触は、鹿島明神の神託と

称して、毎年豊凶・天災等を諸国に触れて歩き、金銀を貰う下級の神主のことである。が江戸時代事触の役割は、大方浮浪の徒の所業となり、悪事を働いたという。百姓は、見失ったタバコ入れを穂積の中から見つけ出し、さてタバコに火をつけて一服し、体を休めていると、そこに事触が回って来た。実りの秋を迎えて、農村は豊かになる。出来秋を狙ってやって来た田舎回りの油断のならぬ事触である。百姓は、タバコを吸いつつふと事触に気付き見ると、その面付きは何となく見覚えがあり、誰やらに似ている。「誰やらに似た」は、百姓の不審に思う表情を表わす。腰を下ろしたまま首を傾げて、事触を見詰める百姓の不審がる表情、その心境まで窺われ、表現平明ながら句作の視点が面白い。

廓つきも夏の間は伊予簾

初ウ三 夏(夏・伊予簾) 「廓つき」は、「ミセつき」と訓み、「顔つき」などの意と同じく、店先の様子という意である。前句の「誰やらに似た」という上五文字に、はっきりとは見えないの意を読み取り、ぼんやりと見えるというところから簾越しに見る体を趣向した付けである。街道筋に面した商家の夏の店先であろう。伊予簾は、当時夏の季節に戸などを明け放ち、家の風通しをよくして家に涼を招き入れるために一般に用いられていた簾である。店先には、夏の間だけ伊予簾が下げられ、いかにも夏らしい涼しげな風情である。その道筋を事触が通り過ぎた。店の主人は、簾越しにその事触れを

見て、「おや、見覚えのある顔だ。誰やらに似ている。はてあの御仁は誰であったか。」と首を傾げる。付句は、前句の不審に思う農夫の様子を、簾越しに外を眺める商家の人の心境に移した趣向である。

うたはれたがる後家の黒髪

初ウ四 雑恋(黒髪) 「うたはれる」は、人に言い立てられる、評判になるの意。「うたはれたがる」は、言い囃されたがるという意である。黒髪は、女性の色気、美人の象徴とされた。つまり黒髪自慢の女性は、あえて噂に上ることを望んでいる後家であろう。夫に先立たれ、その跡を継いで店の切り盛りをする女は、年令二十五才から三十才ぐらいまでの女盛りの未亡人である。一人身が寂しく、男を誘う様子を窺わせる色後家と言った女性と見たい。夏の間は店先に伊予簾を下げ、簾越しに店番をする女主人は、黒髪を奇麗に手入れし、道行く人にその艶なる姿を見せ、人々の噂に上ることを願っているようだという意である。江戸座の人々が好んで用いた詩材、浮世の風俗を描写した作である。簾越しの美人は、しばしば浮世絵の画材となっており、この種の美人画は当時の人々に好まれた。

けふ二日箒もとらぬ物思ひ

初ウ五 雑恋(物思ひ) 「けふ二日」は、今日で二日を過ごした

の意である。「箒も」の箒は、女の仕事としての掃除を意味し、「も」は、掃除のみならず何もかも意である。即ち女としてやるべき家事すべてということである。前句の女性を、いつもはしゃいでいる黒髪自慢のはすっぱ女、尻軽女と見る。しかも女盛りで後家の身となり、時折り独り身の寂しさに襲われる。その女に、愛しい殿子が出来たのである。が、その男に会いたいと思うに任せず、しかもその想いを伝えることもままならない。女は、気が抜けたようになり、今日で二日も箒を取ることもせず、何も手に付かない様子で物思いに耽っているという句作りである。洒落本風の小説の世界で、江戸座の特色を窺わせるが、変化を楽しむ連句としてやや停滞の気味は免れない。

鴨はいやかと敲く枝折戸

初ウ六 雑 枝折戸は、木の枝や竹などを折り並べて作った粗末な簡単な開き戸のことを言い、人里離れた少し淋しい土地柄を思わせる。その建物は、下屋敷、あるいは別邸といったところであろう。前句の人物を男性と見る。その男は、恐らく女道楽が過ぎて勘当の身となり、田舎の寂しい別邸に一人閉じ込められた大店の息子であろう。その息子は、親からお仕置きを受けても反省する様子も見せず、身の回りの掃除もせずに女性に思いを寄せている風である。そこへ遊び仲間の友達が、様子伺いに鴨を下げてやって来た。「鴨はいやか」は、その友人の道楽息子への挨拶言葉である。友は、道楽

息子がさぞ弱り切っているであろうと思ひ、元気づけてやろうと鴨を下げて訪ねて来たのである。江戸座の人々は、当時よくあったであろう巷話を好んで詠んだ。

しばし着て人にも亨ん雪の簀

初ウ七 冬(雪) 「亨ん」は、「クレん」と訓み、簀を返してくれる必要はないの意を込めた表現である。「しばし」は少しの間、ちょっとの間の意だが、「しばし着て」は、少しばかり着た古物だがという意である。「雪の簀」は、雪に風雅の意を添え、雪の折りに用いる簀と軽くあしらった表現で、特に雪簀と言うものがあるわけではない。前句の枝折戸の住人は、人里を離れて俗塵を避け、山里に草庵風の建物を構え、清閑を楽しむ風雅人、文人風の人であろう。その人の許に友人が鴨を携えて寒中見舞いに訪れ、寒さが増して来た冬の季節、鴨鍋で体を温めようというのである。しばらく四方山話を楽しみ、さて友が帰らんとする折から雪が降り出した。そこで庵の主は、「少し着て古びれているけれども、その雪簀を着て帰るたまえ。」と友に簀を勧める。気の置けない清雅を楽しむ気楽な友人同士の心情を詠んだ付けである。蕪村風に通う作風である。

吹戻さるゝ谷の小便

初ウ八 雑 付句は、谷に向かって立ち小便をしたところ、谷から

勢いよく吹き上げる風で、小便が吹き戻されて来たの意である。前句によれば、谷より吹きあげる風は、吹雪である。家を出るときは雪模様であったため、簀を着て家を出たが、途中空が晴れて簀が旅の足手まどいになり、その簀を人に呉れてしまった。峠に差しかかると、案に相違して猛吹雪となってきた。が、先ほど簀を手放したことが悔やまれる。さてなんとしよう。折から小便を催し、谷に向かつてことを済ませようとすると、谷より吹き上げる吹雪で小便が、我が身に吹き戻されてくる。簀を呉れてやったことが悔やまれ、踏んだり蹴つたりの心境である。卑俗な都会風と評される『江戸廿歌仙』の作風を窺わせる。

能うは住む昼もくら馬の木々の奥

初ウ九 雑 「くら馬」は、京都市左京区鞍馬本町の地を言う。「鞍馬寺」「鞍馬山」で知られ、歌にもしばしば詠まれている。鞍馬寺の背後に「僧正の谷」という溪谷がある。前句は、そうした土地柄を想わせる。鞍馬を歌に詠む場合、「昔よりくらまの山といひけるはわがごと人も夜や越えけむ」(後撰集・亭子院の今あこ)のように地名に「暗い」の意を掛けることが多く、この付句も、地名と暗いの両意を兼ねる。「能うは住む」は、「ようこんな所に住んだものじゃ。」と文句を付ける発話体の言葉である。よくもこんな所に住んだこっちゃん、昼も鬱蒼と木々に覆われて暗い。谷の上から下を見下ろしながら用を足していると、己の小便が谷風に吹き戻されて、

足下を汚す。まいった、まいったの心境を詠む。

花にも下司の小言たら〜

初ウ十 春(花) 初折裏十一句目の定座の花を一句引上げる。前句を下司男の小言の言葉と解し、その下司の気持ちをつける。前句の木々を桜の木と見て、付句はその桜の花である。桜の季節を迎え、主人は供を連れて鞍馬山に花見に出掛けたが、その供は、風流を解せぬ下司男ゆえ、桜を愛でる気持など毛頭なく、そればかりか何かにつけて小言を言う男である。せっかくの桜をも楽しもうとしない。供は、「こんな遠い所に連れて来られてしまったものじゃない。鞍馬の桜が見事だなど、とんでもない。辺りは昼でも木々に囲まれて暗い。よくぞこんな所に住む人がいたものじゃ。」などと小言をたらたら言う。全く興ざめな男であるという意である。「花にも」の「にも」は、せっかくの楽しい花見にもと意味を強めるとともに、常に小言を言わずにはおれない下司の人柄を表わす。

御末から末は算もおぼろ月

初ウ十一 春(おぼろ月) 月の出所を三句こぼす。御末は、邸毛の奥向きにあり、下女などが詰めて、雑役や配膳などを行う所を言う。「御末から末は」は、『江戸廿歌仙』によく見られる洒落表現で、御末の間からその先はの意である。即ち、山続きの屋敷に山から御

未まで寢を設けて水が引かれている様子を言う。屋敷の裏山から御末に寢が引き込まれ、春のおぼろ月がその辺りを映し出し、寢をも浮かび上がらせている。その寢に庭の桜が散りかかって春の風情が一層勝るのである。しかし水仕事をしなければならぬ下女にとって、寢に散り込む桜は厄介なものである。下司女が、「桜の花が美しいなどとはとんでもない。」と小言を頻りに言いながら、寢を掃除する体である。「おぼろ月」は、一日が終ったことを意味し、夕暮れ時分の下女の勤めとして掃除が連想される。

余寒の狐そぞろ鳴する

初ウ十二 春（余寒） そぞろは、気持ちが悪く落ち着かない、そわそわした様子を言う。前句を、やや人里離れた狐が住み着くほどの木立こもれる広い庭構えの屋敷と見る。広大な庭と古びた屋敷、その奥の山の方から御末まで寢が引かれ、その辺り一帯におぼろ月のやわらかな光が注ぎ、なお余寒が続いているものの春の気配に包まれ初めた。庭の奥の木立の中に、穴を掘って冬籠りしていた狐が、庭の春の気配に誘われるように穴から顔を出し、落ち着かない様子で鳴き声を挙げている。春なお浅い時分、朧月に包まれて、辺りに怪しげな雰囲気漂う。前句の「おぼろ月」がもたらす幻想的な景を趣向した付けである。

ものよしと共に名古曾の関こえて

名オ一 雑 「ものよし」は、乞食のこと。さすらいの乞食、田舎わたらいの乞食であろう。名古曾の関、陸奥の国の難所であり、付句は、最果ての感を含めた句作りである。「勿来の関」と書き、「な来そ」は「な・そ」禁止の助詞、すなわち「来るな」の意に通じ、人を寄せ付けない難所と言われている。前句の昼も狐が鳴く辺り、それが陸奥の勿来の関の風情であると発想する。春まだ浅い時分、偶々道連れとなったものよしと共に、奥羽への難所勿来の関を越えて陸奥の国に入る。さすがにこの辺りは、今なお余寒が厳しい。とは言え狐は春めいて来た気配に気付いたらしく、狐のそぞろ鳴きが生りに聞こえ、旅路の不安が募るばかり。たといものよしであろうと、少しは旅の不安の助けになるのである。

酒呑ぬ日は馬鹿といふめり

名オ二 雑 難所の勿来の関をやっとの思いで越えたのだから、これからは心おきなく酒を楽しもう、とものよしに語り掛けた発話体の句である。勿来の関は、聞きしに勝る難所で、とても酒を楽しむ余裕などなかったが、それにしても酒を飲まない日などは馬鹿みたいなものだ、という付けである。気楽に酒を飲むことができる相手であれば、人を選ばない、誰でもよいのである。付句は、そうした酒好きの人を趣向する。蕉風俳諧が求めた诗情と異なり、酒好きの人の言いそうな世俗の人間を描いて面白く、一句として川柳的であり、江戸座俳諧の特徴を示す風体である。

ほととぎす蚊食鳥又かんこ鳥

名オ三 夏（ほととぎす） 蚊食鳥は、こうもりのことである。かんこ鳥は、ほととぎすに似て寂しく澄んだ声でかっこうと鳴き、物寂しさを表わす場合にしばしば用いられる。付句は、酒飲みの太平楽、くだまきごとを趣向した句である。一見意味もなく鳥の名を単に並べ立てた句だが、句は古今三鳥に仮託した句作りである。古今三鳥は、古今伝授に見える三種の鳥、即ち呼子鳥・百千鳥・稲負鳥のことである。古今伝授には、古今三鳥などと言う堅苦しい、うるさい面倒な決まりがあるが、そんなことはどうでも良いことだ、余計な講釈は要らんこっちゃ、それよりも酒持って来い、とくだを巻く。酒を飲み出すとなかなか止めようとはせず、飲まない日は、人が変わったように馬鹿みたいに黙って何も言えない、口数少ない気弱な男なのである。そうした人物描写に、本歌仙の特徴が見られる。

仏間に寝たる夢ぞ侘しき

名オ四 雑 前句を山寺に宿した折りのことと見て、付句を寺の仏間と発想する。前句の三鳥は、いづれも山寺に相応しく、物寂しく侘しさを誘う鳥である。付句は、その侘しさを受けて山寺に想いを寄せ、山寺の仏間に泊まって夢に三鳥の声を耳にしたと趣向する。ほととぎすは、死出の田長の異称があり、仏の世界に案内する鳥と解されている。蚊食鳥はこうもりのことで、気味の悪い動物とし

て人に嫌われている。かんこ鳥は、ほととぎすに似ると言われ、物寂しいことに喩えられて古歌に詠まれている。人里離れた山寺に泊まり、夢うつゝのうちに三鳥の声を耳にしたが、その声はいずれももの寂しく、夢は侘しいものであったとの意である。場面の転換を図った句として成功している。

およずけて紅みの二布に我を泣く

名オ五 雑 「およ」は「おゆ（老ゆ）」と同じ意、「およずけて」は、大人になって、成長しての意である。二布は「フタノ」と訓み、布二幅で作る女の腰巻きのことである。付句は、母の形見の腰巻きを趣向する。今は紅の二布を腰に着けるまでに成長した娘が、既に他界していた母を祀る仏間に床を敷いて休んだところ、母の夢を見た。前句の「侘しき」は、母を慕う娘の気落ちした心境である。夢から覚めた娘は、母への思いが募り、切なく気が抜ける思いであった。身に着けていた母の形身の腰巻きに、つい目を遣ると、母への慕情が一層激しく掻き立てられ、娘は我を忘れて泣くばかりであった。前句の寺を在家の仏間に取り成した付けである。

芝居をはらむ浜の商ひ

名オ六 雑 「浜の商ひ」は、三田村鳶魚の随筆に「上ッ調子な浜商内」という文章があり、それによれば、芝居がかった口上で商売

をする様子をいう。前句を、和服の裾を尻はしよりした女が、己の育ってきた境涯に涙ぐむと解し、付句は、その仕草を芝居染みた商いのためと趣向する。女でありながら尻はしよりしたはしたない姿を、浜の商いと言ひ立てた付けである。どのような育ち方をしたのか分からないが、今は腰巻を着けるほどに成長したその女が、紅の腰巻をあらわに尻はしよりして商いをしている。が、そうするにつけては、これまでただならぬ困縁、苦勞があつたのであろう。女は、その我が身の上を泣きつつ商いをしているが、その様子はいかにも芝居がかつてゐることだの意である。

捕者のさはぎに飯がなくなりて

名オ七 雑 「捕者」は「捕物」が正しい。まるで芝居の舞台で演じられているような捕物騒ぎに、露天に店を構えて浜商いをしている商人が、つい見とれてゐる間に、己の弁当飯を掻っさらわれてしまったという付けである。捕物騒ぎがひとまず落ち着き、昼時分になつたので、浜商いの商人は昼飯にしようとして弁当を盗まれてゐることに気付く。芝居がかつた商いをする商人が、芝居の場面を思わせるような捕物騒ぎに気を取られてゐる間に、昼飯をやられてしまった。付句は、その失態を詠む。商人の慌てふためき弁当を探す様子、盗まれたことに気付いて「やられた」とがっかりする表情が思われて可笑しい。

白髪天窓の悴なるらむ

名オ八 雑 「天窓」は「アマタ」と訓む。「悴」は、自分の息子、また若い者を侮つていう語であり、付句は後者の意に解すべきであらう。もし悴を自分の息子の意に解すとすれば、上七文字「白髪天窓の」と殊更に言ひ立てた俳諧作品としての役割だが、生きてこない。捕物騒ぎがひとまず治まり、家に戻つて昼飯にしようとするとならず白髪頭の変な奴がいた。他の者とは風体が違ふ変な奴だ。さては怪しい。飯を盗んだのは、きつとあの悴めに違ひない。人と変わった風体の人を見て、怪しいと疑ひ見るやからを趣向した付けである。

鞞師の名乗は人も覚えたり

名オ九 雑 「鞞師」は、「ユガケン」と訓む。「ゆがけ」とは、弓を射るとき、指を痛めないように右手にはめる革製の手袋をいう。「鞞師の名乗」とは、ゆがけ師としての受領名のことである。あのゆがけ師の名乗りを成した悴の技は、見事なもので素晴らしい。その悴は他の人と異なり、若いのに白髪頭で老いたけた容貌をしている。その異相故に、何か他の人にならぬ豊かな才が備わつてゐるよう思われるとの趣向であらう。オのある人にはそれなりの技があるもので、人々はその人の名乗りをその異相ゆえよく覚えてゐるといふ意の付句であらう。前句の人物の一風変わった風体から、才能豊

かな人を趣向した付けである。

狼吼る遠山の月

名オ十 秋(月) 定座の月を一句引上げる。付句は、漢詩調的氣味の句作りであり、「遠山」を「エンザン」と訓みたい。前句の人の居所、その土地柄を付けた句。名人芸の人の寄る所を定める。名人の仕事場として都会の喧騒、俗塵を避けた土地柄を殊更に言い立てた付句である。ゆがけ師は、孤高なる人であろう。仕事場から遠くに山並みが眺められ、夕暮れ時分には、その山並みの辺りに月がかかる。人の訪れは少ない。遙か彼方の山並みの方から、狼の吼える声ばかりが聞こえて来る寂しい土地である。が、人里離れたそこは、ゆがけ師としての技を磨くのに相応しい場所であり、その人の技は優れたもので、その名は世に広く知られているのである。

松茸があればこそあれ松ふぐり

名オ十一 秋(松茸) 前句は離俗の生活に相応しい土地柄であり、付句は、そうした暮しを望み、何もかも満ち足りた人の心境を付ける。中七文字の「あればこそあれ」には、軽く明るいリズムがあり、楽しい満ち足りた心境を込めた表現である。その人は、恐らく漢詩を嗜む教養人であろう。一句としては松茸があるのだから当然松ふぐりもあって楽しいという遣り句的句作りであるが、単なる景を述

べるにとどまるものではなく、意味する所は深い。狼の声が聞こえ、遠山に月が眺められる絶景である。漢詩的詩情が漂う眺めであり、お詠え向きの道具立てではないか。ここには秋の最上の味覚松茸があり、当然のことながら松ふぐりもあって、目をも楽しませて呉れる。これでこそ万全具足と言うべき所であろう、との心境である。

家のひづみを直す露霜

名オ十二 秋(露霜) 前句に、松茸や松ふぐりなどのある地勢を見定め、そうした土地柄の山住みの庵を発想する。「露霜」は、新古今和歌集の仮名序に「露しもはあらたまるとも、松ふく風のちりうせず、春秋はめぐるとも、空ゆく月のくもりなくして」とあるように、年月を経るの意を表わす。この句の場合、単に季節のみを表わすのでなく、長くその土地に住み親しんできたことをも意味する。これから秋寒むの季節を迎えるに当たり、長年の間に生じた庵の傾きやひづみを直そうという意の付句である。粗末な庵だが、住み慣れたこの辺りは、松茸もあればこそあれ、松ふぐりもあり、この山住みは案外楽しいものだ。前句の「あればこそあれ」に、山住みを楽しむ気分を詠み取った付けである。

下祢宜も一つはもちぬ古多ぼし

名ウ一 雑 下祢宜は、下級の祢宜のことである。「下祢宜も」の

「も」は、たとい身分の低い下祢宜であってもこの意である。付句の「下祢宜」「古ゑぼし」は、前句の「ひづみ」に応じる。前句の「露霜」から長い年月を経て来たの意を受け、「古ゑぼし」と発想する。たとい下級の祢宜とはいえ年代を経た社家は、その職掌を世襲にて代々続ける由緒正しい家柄であり、その下祢宜の家屋も古く、下祢宜故に粗末な建物で、長い年月のため歪も来ている。露霜の季節を迎える頃は、寒風を防ぐために家の歪を直さなければならぬのである。そうは言え時を経てきた職業柄、伝来の古ゑぼしも一つは伝えられていることだということである。

今はと見えて元日の灸

名ウ二 春（元日）「今は」とは、命が今となってはということ、臨終、最後の意で、「今は限り」「今はの際」と言う言い方もある。前句の人物は、身分の低い下祢宜であるけれども、その称宜の家は由緒正しい家柄で、代々伝えられた一つの古ゑぼしがあり、またその家には秘伝の元日灸が伝えられているとの句作りである。「元日の灸」は、単に元日に据えた灸の意ではなく、前句より代々伝えられて来た秘伝の灸という意を趣向した表現と思われる。いにしえより今日に至る時を経てきた家には、それなりの証と成るものが伝来するものと考えた付けであろう。その証は、下級とは言え社家故古来秘伝の元日灸である。長いこと病に苦しみ、これまであれこれと手を尽くしてきたが、いよいよ今日は最後と見えて、その手立てに

下祢宜の元日灸を頼むことになった。

花とのみ孫彦玄彦並居つゝ

名ウ三 春（花） 定座の花を二句引き上げる。「孫彦玄彦」は、「ヒコマゴヤシヤゴ」と訓む。前句の灸を据える人物を、病に臥した大家の老主人と見る。付句は、その老主人の病床を取り巻く一族郎党の様子を趣向する。老人は、やしやごまで揃うというのであるから大変な長寿である。「並居つゝ」は、老主人の実子からやしやごまで一人も欠けることなく、その席に連なる一族の人数の多さを窺わせる。その一族を花と見たのは、一族の繁栄、それを願ひ楽しみとして生涯を送って来た老人の心境と、その人柄を表わす。前句の「元日の灸」は、一族が正月の言祝に集まったこと、及び病床を見舞う意をも含めた表現と見たい。老主人は、元日も床から身を起こすことができず臥したまま、病に耐え兼ねて苦痛を見せる。今や万策尽き、その苦痛を和らげようと一族が見守る中、灸を据えるのである。

藤のしだれをかけし旅駕

名ウ四 春（藤） 駕は駕籠のこと。前句を、一族郎党が各地より本家に集う体と見て、付句は、旅駕籠に乗って遙か遠方からやって来た親族を迎えたおりの主の所作を詠む。その本家には見事な藤が

あり、主がその花見を催すべく、一族を招いて宴を催したのである。主は、家の前に到着した駕籠の上に、藤のしだれ咲いた花の一枝をかけて客を迎えたのである。その藤には、老いた主の長寿のめでたさが思い遣られる。あるいは老主の長寿を祝う会が催されたと解すべきかもしれない。『源氏物語』の「藤裏葉」の巻に、「御時よくさうどきて、藤の裏葉のと、うち誦し給へる、御景色を賜はりて、頭中将、花の色濃く殊に房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。」という一文が見える。内大臣が藤の花の宴を催して夕霧を招いた場面である。『類船集』は、『源氏物語』のこの文によって「藤」と「主もうけ」を俳諧の付合語としている。「藤のしだれを」の付句は、こうした故事を基に発想したものと思われる。

逃ながらわざとも濡る磯の波

名ウ五 雑 前句より磯部の藤を趣向する。越中の多沽の浦は、早くから藤の名所として歌に詠まれ、万葉集（卷十九）に「多沽の浦の底さへにはふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」（繩磨）の歌が知られる。連歌の付合語を記す『連珠合璧集』には、「藤トアラバ、たごのうら」とも見える。海辺の藤、そうした土地柄を想起した句作りである。「わざとも濡る」は、海辺で波に追いつ追われつして戯れ濡れる様子を言う。長途の旅であろう、長時間狭い駕に閉じ込められて駕にあきあきし、駕を下りて浜の藤を楽しみ、藤の一房を取って駕にしだれかける。更に磯辺に立ち、波に戯れ遊ぶ。こ

れも旅の一興と楽しむ体である。あるいは駕の人物を、女性と見るべきか。

日和かたまる鐘の塩梅

揚句 句は雑だが、「日和かたまる」は、寒気が漸く去って、ほかに暖かいよい日和が続く春先の気候と解して良いであろう。付句は、揚句としての言祝ぎの意を含めた句作りと見たい。「鐘の塩梅」は、鐘の音色が程よく響いて来て心地よく、その鐘の響きから好い天氣の続くことが予想されるという意である。前句の磯辺に遊び戯れる人は、恐らく子供達であろう。子供達が好楽日和が続く浜辺で、時の立つのも忘れて波に戯れる。その長閑な様子を眺めていると、入相の鐘の音がふと心地よい響きをもって聞こえてきた。鐘の音色、その響き具合からすると、明日もさだめし今日と同じく、心安らぐ春うららの晴天であろう。穏やかな気候を詠み添え、挙句振りの句である。